

ハッピートラブル

目次

ハッピートラブル	5
世界をやさしく	293

ハッピートラブル

1 不安の中

いいとこだよねえ。

眼下に広がる風景を眺め、姫野蓬は満ち足りたため息をついた。

空気も美味しいし……最こ……

「ふ、ふあつ、くつしよん」

ひんやりした風が鼻先を掠め、おかしなくしゃみをした蓬は、ひとり照れ笑いをしつつ窓を閉めようと手をかけた。

「あつと、う、うーん、くつ……もお、まったくこの窓はっ！」

老朽化した窓は、毎回閉めるのに手こずるのだ。

ここは蓬の両親が経営するペンション『アルプリ』。

西洋風のおしゃれな建物で、蓬もとっても好きなのだ……

「ああっ！」

しっ、しまったあゝ。

蓬は外れてしまった金具を見つめ、顔を歪めた。

十数年前、両親が購入したこの中古のペンションは、いまやあちこちガタガタ……

そろそろ建て替えるか、大々的な改築をするかしないと駄目だな、こりゃ。

古い建物だからこそ味わいがあるのは否定しないが……さすがに壊れるようじゃ問題だ。

この窓に限ったことではないのだ。

……そのうち、この天井も落ちてきたりして？

蓬は疑いの眼で、少々変色している天井を見上げた。

彼女は昨年の四月、ここからは少し遠い大学の観光学部に入學した。大学の近くのアパートに、親友の山本丸美と家賃を折半して住んでいる。春休みに入ったので、実家のペンションを手伝おうと思い帰ってきたのだ。春休みだからお客さんがそこそこいるだろうと思っていたのに、今日なんてひとりもお客さんがいない。

これまで春休みついでえば、けっこうなお客さんで繁盛してたのに……。やっぱり、そろそろ改築しなきゃならないってことなんだろうな。そこらへん、お父さんたち、どう考えてるんだろう？ 金具を手に、蓬は自分の部屋を出た。階段を降り、父を捜して外に出る。ペンションの壁際に一列に植えられた花が可愛らしい。

「くうん、くうん」

その鳴き声に蓬は顔を向けた。飼犬のハヤテだ。名前はすばしっこそうだけど、すつごいドジ犬。何に対してもすぐに夢中になって、はしやぎすぎるのがよくないんだと思うのだが……

とにかく落ち着きがないのだ。ハヤテは蓬の親友、山本丸美の性格にそっくりだ。彼女は甘えて

くる飼犬の頭をちよつと乱暴なくらい、強く撫でてやった。ハヤテは喜んで目を細める。ふふ、可愛いやつ。

「ねえ、ハヤテ。お父さんを見なかった？」
「くう〜ん」

ハヤテの眼差しの揺れは、見てないよと言っている。

「そっか。そいじゃ、家の中だね。行ってみるね」

愛犬の頭から手を離し、背を向ける。途端、「く〜」と寂しそうな声が聞こえてきた。

早朝に散歩に行ったし、朝食のあともたっぷり遊んだというのに……

まったく甘えん坊なんだから。

苦笑しつつ、蓬は振り向いてハヤテの頭をポンと叩いた。ハヤテがくしゅつと顔をしかめる。

くふつ、かつわいい！

「また遊んであげるから。そいじゃ、あとでね」

家に入った蓬は、リビングに父、政志まさしの後ろ姿を見つけて笑みを浮かべた。

「お父さん」

歩み寄りながら声をかけてみるが、反応がない。蓬は、「おとーさん」ともう一度呼びかけながら、父の肩を軽く叩いた。

「う、うん？」

振り返った父の表情は、なんとも冴えない。お客さんが一人もいないんじゃ、当然か。

「これ」

蓬は、父に金具を差し出した。政志の顔が曇る。

「なんだ？ また、どこか壊れたか？」

「うん。わたしの部屋の窓の鍵なんだけど……」

「そうか……」

そう呟いた父は、疲れの滲にじむため息をつく。

「あのさ……この家、もう改築しなきゃなんないんじやない？」

「ああ……まあな」

言葉を濁すように言う政志に、蓬はどきりとした。もしや、改築するだけの蓄たくわえがないのでは？

蓬は顔をしかめた。胸がチクチク痛む。蓄えがないとすれば、それはわたしのせいだ。授業料の

高額な、私立の大学になんか入っちゃったから……

卒業まであと三年もあるというのに……いや、このままじゃ大学どころかこのペンションも……

「大丈夫だ。蓬、心配するな」

知らぬ間に俯うつむいていた蓬は、パッと顔を上げて父を見つめた。

胸が詰まった。父はずいぶんやつれて見える。そんなに追い詰められているのだろうか？

「で、でも……お客様、予約とか、ほとんどないんでしょ？」

ふたりの話を聞いていたのだろう、キッチンにいたらしい母の依よ子がふたりのところにやってきた。

「あ……あのね、蓬。大事な話があるの」

母親の深刻な表情に、蓬はごくりと唾を呑み込んだ。

2 やつぱ、無理

「きゅ、休学う？」

目をまんまるにした丸美は、膝立ちになって小さなテーブルに両手をつき、大声で叫んだ。

あのあと両親と話し合い、蓬は大学を一年休学することになった。

両親からペンションを改築するだけの蓄えはあると聞き、蓬は盛大に安堵した。だが、蓬の次年度の学費はない。さらに改築中は当然収入がないため、月々の仕送りも無理。結局、蓬はこのアパートで暮らしながらバイトをして生活することにした。

話し合いが終わってからというもの、両親は娘を休学させなければならぬことがひどく辛そうだった。そんな両親を見ている蓬も辛くてならず、予定を切り上げて早めに戻ってきたのだ。

改築してまたお客さんが来てくれれば、来年には復学できる。蓬としては、その間に両親に少しでも負担をかけないで済むよう、バイトでしっかりと稼いでおくつもりだ。

「うん。でも……」

「ど、どうすんの？ 困るよ、困るって！ わたしはどうなるの？ このアパートは？」

言うと思つたが……こいつめ。

「丸美さあ……まずは休学しなければならなくなった、この可哀想なわたしを慰めなよ」

蓬は呆れて言った。

丸美は、ハヤテが怖がつてきやんきやん鳴きながら逃げるときと同じ顔で、身を引く。

「だ、だつてさあ、あんたとわたしは一蓮生じゃん。蓬の不運はわたしの……」

「いちれんしように……？」

聞き返しているうちに、悟つた。一蓮托生いちれんたくしょうと言いたかつたのに違いない。

「いちれんしように、いちれんしように……。だよね？」

強い口調で繰り返しているうちに、確信が弱まったらしい。不安そうに聞き返してくる。

「……一蓮托生だよ」

「あ、ああ。たくね。そうか、そうだよ。いやだ、もおつ、蓬つたら」

あははと誤魔化すように笑う。疲れるやつめ。蓬はため息をついて、自分の部屋を見回した。

ふたりがおしゃべりするのは蓬の部屋と決まっている。丸美は片付けという概念を持たない子なのだ。当然、丸美の部屋は見るも無残なほど散らかっている。あまりのひどさに、綺麗好きの蓬は片付けたくなるが、丸美の私室に手を出すようなことはしない。なんとかふたりの共有の場が整頓されているのは、蓬の厳しい指導のたまもの。

「ねえ、仕送りはゼロになるの？」

「うん。少しくらいならつて言ってくれたけど、生活費はバイトでなんとかなるからつて断つた」

「でも改築できるだけの貯蓄があつて、よかつたよね」

蓬は笑みを浮かべて頷いた。愛情を注いできたあのペンションを手放すなんてことになっていたら、両親も蓬も辛くてならなかっただろう。

「ペンション経営も大変なんだねえ。すつごく素敵なペンションなのに……」

「老朽化してなきやね」

「確かにね……かなり古くなってるなって思ってた」

二度ほど来たことのある丸美の正直な感想に、苦笑いしてしまう。

「うん。わたしがいた間のお客さん、なんと五人だよ。お客さんが少ないと、出費ばつかで……かえって赤字になるんだよね」

「で、でもさ。改築したら、またいっぱいお客さん来てくれるよ。景色最高、もてなし最高、お料理も抜群に美味しかったからね」

「ありがとう」

丸美に感謝の笑みを向けると、丸美は蓬の手を取り、力づけるようにぎゅっと握り締めてくれた。丸美のおかげで元気が湧いた。ほんと、手はかかるけど、素直でとびきりいい子だよねえ。

「ねえ、蓬。とにかくさあ、休学しないで済む方法がないか、知恵を絞ってみようよ」

休学しないで済めば、蓬だつてそりゃあ嬉しいが……難しいだろう。

「丸美、大学の授業料、いくらか、知らないわけじゃないでしょう？」

「そ、そりゃあまあ……けどさ、一括じゃなくて月払いもできるはずだよ。月払いなら……」

「なんともならないつて。いまのわたしのバイト代じゃ、アパートの家賃と生活費で消えちゃうよ」

ことごとく言い返されてむっとしたらしく、丸美が拗ねた目を向けてくる。

大きな目の丸美がそんな表情をすると、なおのことハヤテに似て見える。

「はじめつから、そんな風に諦めてちゃ、いい解決策なんて思いつけないと思うんですけどお」

ほつぺたをパンパンに膨らませて言う丸美に、蓬はため息をついた。

蓬だつて色々考えてみたのだ。バイトを三つくらい掛け持ちして、なんとかならないかとか……

だがどう考えても、高額の学費を稼ぎながら大学に通うというのは無理がある。

お金を稼ぐというのは簡単じゃない。いまの蓬は、バイトで生活しながら、どれだけ貯金ができるのかということを考えなければならぬのだ。

いまやっている靴屋のバイトは週に二度。できればもつと働きたいが……

経営者である森之宮杏子は、両親がやっているペンションの常連客だ。杏子はペンションを気に入っていて、年に何度も来てくれている。実は蓬の通っている大学も、杏子がすすめてくれて受験したのだ。さらに靴屋でのバイトにも誘ってくれた。蓬が事情を話してもつと働きたいと言えば、杏子はきつと快諾してくれるだろう。だが、そうなると他のバイトの子のシフトが減ることになる。やはり新しいバイトを探すよりない。なるべく割のいいのを……

「蓬が休学しちゃうんなら、わたしも休学しようかな」

考え込んでいた蓬は、丸美の言葉に目を丸くした。

「ま、丸美、何を言い出すのよ」

「だつて……蓬がいるから、なんとか課題もクリアできて、進級できることになったんだよ。蓬が

「一緒になきゃ進級なんて絶対無理だもん」

はあくつ。蓬は盛大に息を吐き出した。

「あのねえ、丸美。あんたはできる子なんだよ。課題の意味を勘違いしたり、試験でのイージーミスが多すぎるの」

「それが直せないから、蓬を頼るんじゃない」

丸美は唇を突き出して言う。

「自立しろっ！」

蓬は思わず怒鳴りつけた。

握り締めた両手を顎の下に当て、丸美は怯えた子犬のように震える。

「あーのねえ」

「わ、わかってるもん！ 馬鹿じゃないんだから」

「へーっ、いまのが、わかってるひとの発言ねえ」

蓬は頬をヒクヒク引きつらせて言った。

「蓬、意地悪すぎるよお……」

涙目になっている丸美を見つめ、蓬は大きなため息をつくど、改めて口を開いた。

「でも、丸美は自立しなきゃ。わたしが一生一緒にいてあげられるわけじゃないんだから」

「そ、そんな悲しいこと、言わないでよお」

丸美はピーピー泣き出した。

やれやれ……

「なんか、飲む？ 丸美、ミルクティーなんてどう？」

すすり泣きながらも頷く丸美を見て、蓬は苦笑しつつ立ち上がった。

自立の必要性は感じるが、それでも丸美は大丈夫だと思う。性格も悪くないし可愛いし、きっといい相手が現れる。頼りがいのある男性なら、丸美のドジな部分さえ可愛く見えるだろう。

「はい。丸美、ミルクティー」

すすすと鼻をすすっている丸美に、蓬はカップを差し出した。

「あ、ありがと」

少しは落ち着いたらしい。小さく頭を下げてお礼を言い、丸美はカップを口に運ぶ。

蓬は自分の湯呑みを取り上げた。緑茶だ。蓬は緑茶が大好きなのだ。それにケーキよりもおまんじゅうや大福のほうが好み。もちろんケーキが嫌いってわけじゃないんだけど……

「……あのさあ」

おずおずと丸美が話を切り出してきた。

「うん？」

「お兄ちゃんと香織さんなら、力になってくれると思うんだ。相談してみようよ」

「それって。あの店でバイトすること？」

丸美は、兄の山本陽介が経営している店でバイトをしている。香織は陽介の妻だ。

靴屋とかけ持ちで働かせてもらえるだろうか？ だが、ふたりの経営しているお店は、『エンジエ

ルカフェ』という名のコスプレ喫茶なのだ。わ、わたしにやれるかな？

「う、うーん、それがさあ、いま募集してないんだよ」

「な、なんだ」

蓬は思わずがっかりして肩を落とした。コスプレしてウエイトレスなんて、気が引けていたのに、駄目と聞くと惜しく感じるとは……わたしって、勝手なやつ。

「ええっ！ よ、蓬、まさかその反応……バイト、やる気あったの？ 香織さんからいくら誘われても、ずっと断ってたのに……」

「これまではね。そんなに稼ぐ必要を感じてなかったもん。いまのバイトで充分だったし。だけど、今はそんなこと言ってるんじゃないじゃん。……でも、募集してないんじゃない駄目だね」

「いやいや、何言ってるの。蓬がやりたいってんなら、とにかく聞いてみようよ」

それって、無理やりお願いすることになるんじゃないだろうか？ だが、いまはなんにでも継りたい。雇ってもらえるなら、時給以上の働きをするつもりで……

け、けど、コスプレだよ。という心の声を、ぎゅっと握り潰す。

「そうだね。聞いてみようかな。……時給、すごくいいみたいだもんね」

その代わり、かなりぶつとんだコスプレをして、客をもてなさなきゃならない。

丸美がバイトしているから、蓬も何度か客として行ったことがあるのだ。そのときの店員たちの様子を頭に浮かべ、つつい顔が引きつる。

丸美は、美少女戦士マリカというキャラに扮^かっていて、「君のハートを、マリカのミラクルパン

チでとろかすぞお〜」と言いながら、真っ赤な猫足グローブをはめた手で、客の胸に可愛らしくパンチを繰り返していた。丸美と同じことをしている自分を想像しようとした途端、眩暈^{めまい}に襲われ、蓬は手のひらでぐっと額を押さえた。可愛い顔をしている丸美には嵌^はまり役だが、蓬がああ姿をして可愛くもなんともない。募集してなくてよかったのかもしれない……もし募集していたら、金欲しさにやってしまっていたかもしれない。客の冷笑を浴びている自分を思い浮かべ、顔が歪^{ゆが}む。

「蓬、どうしたの？ 気分悪いの？」

心配そうに顔を覗き込まれ、焦^{あせ}った蓬は急いで話を変えた。

「あ、あのさあ。陽介さん、他にバイトの口とか紹介してくれないかな？」

できるだけ割のいいのを、と付け足したかったが、さすがに口にできなかった。

「うーん。そだね。とにかく会いに行ってみようよ。まずは兄貴に連絡取ってみるね」

蓬は感謝を込めて頷いた。

「ねえ、ところでさ。参考のために聞きたいんだけど、『エンジェルカフェ』の時給は、いくらくらいなの？」

「二千五百円だよ」

携帯をポケットから取り出しながら、丸美はこともなげに言う。蓬は呆気にとられた。にっ、二千五百えくん!?

「こ、コスプレ喫茶って……そんなにもらえるの？」

蓬は思わず頭の中で計算した。日曜日、八時間働かせてもらえたら二万円になるのか？

胸がドキドキしてきた。

携帯を操作する手を止めて丸美は頷き、さらに説明してくれる。

「うちは、他んところより高いと思う。その代わり、審査がすごく厳しくて、そう簡単に雇ってもらえないんだよ」

「ええっ、審査なんてあったの？」

目を丸くしている蓬を見て、丸美はくすくす笑う。

「うん、本来はそうだよ。蓬はあっさり断っちゃったけど、香織さんの審査に受かるのは簡単じゃないんだよ」

「そ、そうだったんだ」

「うん、そうなの」

そう答えながら、丸美は陽介に電話をかける。

断ってしまったもつたいなかったかも……時給二千五百円をみすみす棒に振っていたとは……でも、コスプレだしなあ……微妙だあ。

蓬は眉を寄せて真剣に考え込んだ。

こうなったら、頼み込んでなんとか雇ってもらわうべきか？

い、いやいや、「ミラクルパーンチ」だもんな、しかも猫足で……

猫足を着けてへんてこな笑いを浮かべている自分がポントと浮かび、頬がヒクつく。

やっぱ、無理かもお……

3 未来に不安

居間に通された蓬は、緊張の面持ちで勧められたソファに座った。もちろん丸美も一緒に来てくれている。

「急にお邪魔しちゃって、すみません」

蓬は陽介と香織に頭を下げた。面倒な頼みごとを抱えているせいで緊張しているのだが、なぜか香織はにこにこ顔で蓬を見つめている。

な、なんなんだろう？

「姫野君、大変なことになったな」

陽介から言われ、蓬は慌てて頭を下げた。

「は、はい。厚かましいお願いに来てしまって……」

蓬の事情は、すでに丸美がふたりに伝えてくれている。

「ねえ、それで、蓬のこと雇ってもらえる？」

出し抜けに丸美が話を切り出し、蓬は焦った。

「ま、丸美。いきなりすぎるよ」

蓬は丸美を抑え込むように手をかけた。

「いきなりって……わたしら、雇ってもらえるか聞きに来たんじゃん」

「そ、そうだけど……」

ドキドキしてならない。雇ってもらえなかったらがっかりしてしまうが、雇ってもらえたらもらえたで、コスプレをしなければならぬのだ。

「なんとしてでも、蓬が休学せずに済むようにしないとならぬんだよ。いまバイトを募集してないのはわかってるんだけどさ……お願い、このとおりだから。蓬のこと雇ってもらえないかなあ」

丸美は必死の形相で、両手をこすり合わせながら拝むように頭を下げる。蓬も慌てて丸美にならった。「バイト募集はしてないけど、蓬ちゃんならもう大歓迎よ。実はね、蓬ちゃんにぴったりの役どころがあつて、わたし、ずっとプランを練ってたのよ。ねえ、陽介さん」

「ええっ！ 香織さん、どんなプランなの？ なんかの役？ 聞かせて、聞かせて」

丸美ときたら、飛びつかんばかりに香織をせつつく。

「ふふ。実はねえ……」

「香織。その話はあとにしよう。まだ問題は解決してないんだからな」

「なんでよ？ お兄ちゃんとか時給いいし、このお店でめいっぱいバイトさせてくれさえすれば、なんとかなるよ」

「丸美。さすがに生活費と学費の両方を稼ぐつてのは無理だぞ」

「えーっ！ そんな冷たいこと言わないで、お兄ちゃん、なんとかしてよお」

無茶を言い出した丸美に、蓬は慌てた。

「丸美つてば、無理を言っちゃ駄目よ」

「だ、だつてさ……他に頼れる人いないじゃん」

他に頼れるひとがないわけではないのだが……。杏子ならば……いやいや、駄目駄目。迷惑をかけるかわかっていて頼れない。大学を一年休学すればいいだけのこと、やはり諦めよう。人様に迷惑をかけて大学に行くなんて、両親だつて嫌に違いない。

「あの、おふたりとも、すみませんでした。無理なお願いだということはわかっていました。もう諦めます」

「おいおい、姫野君、そう結論を急ぐなよ」

「でも……」

「お兄ちゃん、自分が無理つて言ったんじゃん」

「それは俺のこのバイトだけでは無理つて意味で言ったんだ。もしかすると、なんとかしてくれるかもしれないし……ひとつ相談してみようかとな」

微妙な言い回しだつたが、なんとかしてくれるかもしれないという言葉に、思わず期待してしまう。

「えっ、お兄ちゃん、それ、ほんと？」

「陽介さん、何かいい方法があるんですか？」

蓬も勢い込んで陽介に問いかける。ふたりの食いつきっぷりに、陽介が声を上げて笑った。

「ふたりとも、あんまり期待してくれるなよ。可能性があるつてだけで、絶対じゃない。とにかく相談してみるから」

携帯を取り出す陽介に、蓬は戸惑いつつ頷いた。

「どうも、山本ですが。……はい。那義さん、いまよろしいですか？」

陽介が電話の相手と話す様子を、蓬は息を詰めて見守った。

この交渉次第で、蓬の未来が変わるのだ。

「ねえねえ、香織さん。那義さんって、お兄ちゃんのお店のオーナーの片腕さんですよ？」

丸美が香織のほうに身を乗り出し、こそこそと話しかける。香織が「そうそう」と頷いた。

オーナーの片腕？ こ、これは、かなり期待がもてそうな気がする。陽介のお店のオーナーはかなり裕福なひとらしい。実は蓬と丸美が住んでいるアパートも、そのオーナーから破格の低家賃で借りているものだ。

陽介は、蓬の現状……次年度分の学費や生活費を、わけあつて親に用立ててもらえなくなり、なんとか自力で働いて大学に通いたいと思つて伝えることを伝えてくれた。

「蓬、那義さんってひとが味方になつてくれたら、百人力かもよ。すごいやり手らしいもん」

「そ、そうなの？」

丸美の言葉を聞き、蓬は香織に目を向けてみた。香織は丸美の言葉を肯定するように、微笑みながら頷いてくれる。蓬の期待はさらに膨らんだ。

「そうですね。わかりました。彼女に聞いてみます」

陽介が振り返つて蓬を見る。緊張からごくりと唾を呑み込んだ。

「姫野君、これからなら時間があるし、君に会いたいって……行けるかい？」

突然すぎるし、ためらいも感じるが、尻込みなどしてられない。蓬は大きく頷いた。

「行きます。もちろん」

陽介はこれから連れていくと伝え、すぐに携帯を切った。

「それじゃ、行こうか」

さつと陽介が腰を上げたところで、「ちょっと待って」と香織が声をかける。

「なんだ？ 香織」

「那義さんに相談して、どうなるにしても、蓬ちゃんにはわたしたちのお店で働いてもらいたいわ。

いいでしょう、蓬ちゃん」

「は、はい」

「そうだな。週一くらいなら、大丈夫なんじゃないか？ どう姫野君、やつてくれるかい？」

週一ということは、たぶん働いてほしいのは休日なのだろう。土曜日は靴屋でバイトだが、日曜日から大丈夫だ。面倒な相談に乗ってもらつているのだし、そのお礼になれば嬉しい。コスプレ、頑張ってみよう。

「それでは、やらせていただきます」

「ほんとに？ やったわ！ もちろん無理は言わないわ。週一でも充分」

「蓬と一緒にバイトできるんだね。いやっほーい！」

勢いよく叫んだ丸美が、ぎゅっと抱き着いてきた。

「わわっ」

「蓬と一緒にバイトできて、コスプレ姿も見られるんだあ。香織さん、できればさあ、蓬もマリカルのメンバーにしてよ」

「丸美ちゃん、マリカルは三人。もうメンバーは揃ってるから駄目よ」

「隠しキャラってことでさ。お店のオリジナルで作っちゃえばいいじゃん」

「うーん、それも魅力的ね。けど、さっきも言ったとおり、もう決めてるの。蓬ちゃんの魅力を最大限に引き出せるキャラよ。楽しみにしててね、蓬ちゃん」

「いったいどんなコスプレをすることになるのか、蓬は自分の未来にかなりの不安を覚えた。」

4 料理のお受験

「陽介さん、本当にご面倒をおかけして、すみません」

車が走り出したところで、蓬は陽介に頭を下げた。

「いやいや、いいって……俺こそ丸美が世話になりっぱなしで、君にはすまないと思ってるんだ。丸美も言ってたが、あいつが進級できたのは君のおかげだし。なのにあいつときたら、自分のことしか考えてない。我が妹ながら呆れるぜ」

世話をしているというのの事実だが……自分のことしか考えていないということはない。

「丸美はやさしいです。わたしことを心配して、一生懸命になってくれて……」

陽介がふっと吹き出し、蓬は戸惑って顔を向けた。

「君はあいつの食事を作り、弁当も作ってやり、アパートの掃除もしてやってるんだろ？ さらに、課題も手伝ってくれてる」

「あ……は？」

「丸美は君に甘えすぎだ。もっと自立したほうがいい。兄としては、あいつの将来が心配でならん」陽介の言葉に蓬はハツとし、ひどく気まずくなった。

わたしは丸美を甘やかしてしまっている。それは丸美のためになっていないんだ。

「すみません、陽介さん」

「えっ？ お、おいおい、俺は君を責めてるわけじゃないんだぞ。あいつが悪いんだって。姫野君は被害者だよ」

「被害者なんてことは……丸美や陽介さんのおかげで、あんないいアパートに格安で住まわせてもらえて、感謝しているんです」

「とにかく……なんとかなるといいんだがなあ」

真剣に考えてくれている陽介に、彼女は感謝を込めて頷いた。

「さーて、姫野君、着いたぞ」

「えっ、もう着いたんですか？」

まだ五分も走っていない。

「ここの最上階なんだ」

見上げた建物は、かなり高級そうなマンションだった。

「では、改めて紹介させてもらうよ。姫野蓬君だ。今度大学二年になる」

「ふん、ふん」

向かいに座っている男性が軽い返事をする。

「姫野君。このひとは、貴島弥義さんだ」

「よ、よろしくお願います」

焦りつつ頭を下げたが、蓬は内心首を傾げた。

いま陽介は弥義と言ったような……電話で話しているときには、那義と言っていた気がするのだが……

それにしても、丸美の話とはイメージが違いすぎていて、面食らった。

オーナーの片腕で、すごいやり手のひとだと言っていたけれど……

蓬は、改めて弥義を見つめた。二十代前半くらいの男性で、大きなドクロ模様のTシャツに真っ赤なジャンパー、破れたジーンズを穿いている。髪はちょっと長めで、洗ったまんまという感じ。

もちろん、人は見た目ではわからないものだが……

「それで、弥義、どうにかなるかな？」

「うん。妙案がね、あるにはある」

「妙案？ どんな？」

「君さ、料理は得意かい？」

唐突に弥義が蓬に質問してきた。

「は、はい？ 料理ですか？」

「姫野君は、料理の腕はいいようだぞ。俺の妹がずいぶんと自慢してる。けど……料理って？」

「若のだよ」

「えっ？」

陽介がきよんとした。

わけがわからない蓬は、ふたりのやりとりを黙って見守る。

「オーナーのつて？ 意味がわからないんだが……」

「若の夕食を作ってもらうのさ」

「け、けど……オーナーは……無理だろ？」

陽介は、言葉にかなりの力を込めて言う。

「那義は試すと言ってる」

那義？ どうやら那義というひと存在しているらしい。

「ま、まあ……那義さんがそうするっていうなら……けど、無理だろ？」

陽介は、蓬をチラッと見て言う。蓬は肩を落とした。そんなに無理だ無理だと連呼されては気落ちする。

「陽介、お前が無理無理言うから、姫野さんが落ち込んだじゃないか」

弥義に叱られ、陽介は顔をしかめた。

「あっ、姫野君、ごめん」

「い、いえ……」

「姫野君」

弥義から改まって声をかけられ、蓬は姿勢を正した。

「はい」

「君には、試験を受けてもらいたい」

「試験ですか？」

「君の作った夕食を君が受け入れたら、今後君には若の夕食係になってほしい。その場合、君の問題はすべてこちらでなんとかしよう」

「な、なんとか……？」

どうにも話が呑み込めない。夕食を作って若というひとが受け入れたら、蓬の学費をなんとかしてくれるのだろうか？

夕食を受け入れてもらうというのがどういうことを指すのか、いまいちわからないのだが……？
だが、もし夕食を作るだけで学費を出してもらえらなら、あまりに蓬にとって都合のいい話だ。

「姫野君」

困惑していると、陽介が声をかけてきた。

「は、はい」

「夕食を作るだけだが……ことはそう簡単じゃないんだぞ。まず無理だと思って挑んだほうがいい」
「そ、そうなんですか？」

「おいおい、陽介。これから試験を受けてもらうつてのに、そんな萎縮させるようなこと言つなよ」
「だが真実だ。簡単じゃないつてわかってるから、そつちだつて、ありえないほどの好条件を出してきてるんだろ？」

「ま、まあな……」

陽介の指摘に、弥義は困つたように頭を掻く。

「けど、可能性はあるんだからさ……なあ、姫野君、もちろんチャレンジするだろ？」

弥義に問われ、まだ話がよく見えていなかったものの、蓬は頷いた。

「はい。まだよくわかっていないんですけど……とにかくわたしは、夕食を作ればいいんですよ？」

「そういうこと」

「あのどんなものを作れば……い、いえ、その前に……もし試験に受かったら、本当にわたしの学費を……？」

「うん。若が君の夕食を食べて受け入れたら、君の学費及び生活費はすべて保証しよう」

「生活費も？」

「そりゃあ、学費だけじゃやっていけないだろ？」

「で、でも。あの夕食を作るだけなんですか？ 掃除とか……」

「それは必要ない。君は夕食を作るだけでいい。仕事の負担が増えたんじゃ、大学に通えなくなる」

話を聞けば聞くほど驚きが深まり、蓬は目を丸くした。

「つまり、料理のお受験ってわけだよな」

料理のお受験？

「姫野君、繰り返し返すけど、このお受験の合格率は一パーセントに満たないと思って挑むんだぞ」
言い聞かせるような陽介の言葉に、蓬は頷いた。

しかし一パーセントに満たないとは……

確かにこんな好条件のバイトが、そう簡単なわけがないだろうが……

「あの？ 何か対策とか秘訣ひけつとかは……」

「ない」

弥義の返答は取りつく島もない。

「君はなんでもいいから、とにかく作ればいいんだ。君がこのチャンスをものにできるかどうか、俺たちにもわからない」

結局、詳しいことはまったくわからないままだったが、夢のような好条件のバイトをゲットするため、蓬は料理のお受験に挑むことになったのだった。

5 不安を抱えて結果待ち

陽介は店があるからと先に帰り、蓬はそのまま弥義に案内されてオーナーの家に行った。なんとオーナーの家は弥義と同じマンション、しかも隣の部屋だった。

まるでモデルハウスのようなおしゃれな家に思わず息を呑む。さらにキッチンに入り、目を丸くしてしまう。そこにはあらゆるキッチン用品が揃っていた。冷蔵庫の中の食材の豊富さに、ため息が出そうになる。どれも見ただけで高級食材だとわかる。蓬はちよつと興奮してきた。こいつは腕が鳴るといふもの。

「びっくりです。食材、すごく揃ってますね。なんでも作れそう」

「食材のストックは那義がしてる。料理も那義の担当なんだ。それ以外の掃除とかは俺の担当だけどね」

「おふたりが？」

この弥義が家事をやっているなんて、なんだかおかしな感じだ。

見た目で決めつけちゃ駄目だろうけど……

「うん。ほかに任せられる人材がいなくてね」

「そうなんですか」

「まあ、そんなことはいいから、料理作って。俺、そのテーブルで仕事してつから。料理は二人分頼むね」

これから難関のお受験が始まるにしては、あっさりと言われ、緊張が緩む。「わかりました」

ついついリラックスして答えてしまい、蓬はそんな自分を叱りつけたくなった。大学に行けるか行けないかの瀬戸際なのだ。しつかりしなければ……

だが弥義を見ると、椅子に座り、のんびりとファイルを見ている。

蓬は物足りない気分のため息をつき、キッチンの引き出しをチェックして何がどこにあるかを確認した。そして食材を見て献立こんだてを決める。そこにあった大きなエプロンを借りた蓬は、必要な食材を出し、さっそく料理を開始した。

キッチンは機能的、調理器具も一級品だ。切れ味抜群の包丁を持つと、楽しくてたまらない。料理に夢中になった蓬は、ハミングしつつキッチンの中を動き回った。

「弥義さん、できましたあ」

思わず軽く拍手しながら、蓬は弥義に報告した。ちょうど蓬を見ていたらしく、ふたりの目が合う。「君、手際がいいなあ」

立ち上がった弥義は感心したように口にし、キッチンに入ってきた。

料理を目にし、「うおっ、うまそーっ」と言う。悪くない反応にちよつと嬉しくなった。

お受験を終えた蓬は、言われていたとおり陽介の家に戻った。結果はあとで陽介に連絡してくれるということだ。

インターフォンを押すと、玄関から丸美が飛び出してきた。なんと、美少女戦士マリカの姿のままだ。

「蓬、おつかえりい」

猫足で、ポンポンと胸のあたりを叩いてくる。

「丸美、出てきちゃって、お店いいの？」

「いいのいいの。わたしはもう上がりだよ。それで、それで、どうだったの？」

「どうって……夕食作って帰ってきただけだから」

「えっ？ なにそれ？」

「丸美、陽介さんから、何も聞いてないの？」

陽介の車は、車庫にある。帰ってきているはずだ。

「聞いてないよ。わたし、ずっとお仕事してて、いま上がったばかりだもん。……あれっ、そーいや兄貴は？ 一緒に戻ってきたんじゃないやなかったの？」

「ううん、わたし、料理をすることになったから、陽介さんは先に帰ったの」

「へっ？ 蓬、どうやって帰ってきたのよ？」

「歩いてよ。車で行く必要がないくらい、近かったの」

「そうなんだ。それで、料理って……ああ、とにかく家に入ろう」

丸美に手を取られ、蓬は陽介の家に上がらせてもらった。

「よおっ、帰ったな」

家の奥から陽介が現れ、歩み寄ってくる。

「お兄ちゃん、家にいたの？」

「ああ」

「ねえ、どういうことなの？ 蓬、料理を作ってきたって……」

「居間に行こう。話はそれからだ」

ソファに座り、蓬と陽介は、丸美に一部始終を話して聞かせた。

「へーっ。それじゃあ、蓬、オーナーさんの専属料理人になるってわけ？」

「もしも合格できたらってことなんだけどね」

「それなら、もう間違いないだよ。蓬の料理は文句のつけようがないからねえ」

丸美の言葉を聞き、蓬は思わず陽介と目を合わせてしまう。

「なんかね。合格率すごく低いみたいで」

「何言ってるの、自信持ちなよ。蓬の料理なら絶対大丈夫だって」

「いいか丸美、これはそんな簡単なことじゃないんだ。だからこそ、ありえないほどの好条件を提示してくれてるんだ」

「好条件？ どんな条件なの？」

「うん、それが夕食を作るだけで、学費を払ってもらえて、生活費もくれるって」

「ええっ!? す、すっごいじゃん。まさにありえないほどの好条件だよ。蓬、やったね！」

丸美はすでに蓬が合格したかのように、無邪気に飛び跳ねながら肩をバンバン叩いてくる。

「だからね、そんな簡単じゃないらしいんだってば」

そう繰り返すものの、合格を信じて疑わない丸美ははしやぎ続ける。蓬と陽介は目を合わせて苦笑いを浮かべた。

「丸美、もうお仕事終わったんなら、着替えて帰ろ」

「ああ実はな、香織が君らにも食べてもらいたいわって、カレーを作ってるんだ。試験の結果も気になるだろうし、結果待ちついでに食べていかないか？」

「うわあ、楽しい。ご馳走になるなる。そいじゃ、わたし着替えてくるね」

蓬は丸美と一緒にスタッフルームの更衣室に向かった。

「香織さんと陽介さんって、お店のほうは出なくていいの？」

「ふたりとも顔は出すけど、ずっとじゃないよ。裏方仕事のほうがメインだし。お店はキャップがいて、全部仕切ってる」

「そうなの」

「蓬も、お店に入ったら紹介してもらえるよ。キャップ、すっごいカッコいいんだよ」

「女のひとなんでしょう？」

「違うよ。キャップは男のひと」

「へーっ。男のひとは厨房だけじゃなかったの？」

「キヤップも、問題が起きない限り表には出てこないよ。でも、みんなキヤップに褒められたいって、頑張っているとこがあるんだ」

しゃべっているうちに丸美は着替えを終え、ふたりは陽介たちの待つキッチンに行った。

美味しそうなカレーの匂いに、空腹を感じる。彩りのよいサラダも大きなお皿いっぱい盛ってあった。早速席に座ってごちそうになる。

「すごく美味しいです」

「そう。嬉しいわあ。わたし、カレーだけは自信あるのよお」

「うん。香織のカレーは最高だ。しかも、いろんな種類を作れるんだよ」

デザートと紅茶までいただき、お腹が満足した蓬は、やけに落ち着いている自分に気づいた。そろそろ結果の電話がくるはずだが、どうせ駄目だろう。合格率がパーセントにも満たないんじゃ、期待も持てやしない。だからこそその、好条件。世の中そんなに甘くはないのだ。

それでも、陽介のポケットから着信メロディが鳴り始めると、どきりとした。陽介が携帯を確認し、蓬に向けて意味深に頷く。やにわに鼓動が速まり始めた。

も、もしかすると……もしかして、合格してるかも。そしたら大学に通い続けられるのだ。

蓬は無意識のうちに両手をぎゅつと握り合わせて、携帯を耳に当てる陽介を見守った。

丸美も香織も陽介に注目する。

「はい。山本です」

陽介が表情を引き締めたのを見て、蓬はぐつと眉を寄せた。

やっぱり、駄目……だったのか？

「蓬」

丸美が力づけるように呼びかけてくる。

「うん」

「那義さん。……はい。彼女はいまここに。どうでしたか？」

電話をかけてきたのは、那義というひとのほうだったらしい。

心臓が破裂しそうなほどドキドキする。結果次第で、蓬の未来が決まるのだ。

「そうなんですか？ ……わかりました。伝えます。それじゃあ」

「陽介さん、あ、あの？」

陽介が電話を切るのを待っていた蓬は、何かに急かされるように声をかけた。

だが、陽介は黙ったまま。

「ちょっとお兄ちゃん。早くなんか言いなよっ」

「お、おお……うまくいったらしい」

信じられないというように陽介が言う。

ドキドキしっぱなしだった蓬の心臓は、その言葉に大きく跳ねた。

「ほ、ほんとですかっ」

「う、うん。驚いたな。まさか合格するとは……。と、ともかくよかった。これからのことを話したいから、明日午後四時半に那義さんとこに来てくれっつてさ。あ、今日行った弥義のマンションと

同じ部屋だから」

「は、はいっ」

返事をした途端、身体中の力が抜け、蓬はよろよろとその場にしゃがみ込んだ。

6 途方もない条件

超難関だと聞かされていた料理のお受験に無事合格した蓬は、翌日、指示されたとおり、那義たちのマンションに向かった。夢のような気分だが、その半面、好条件すぎて不安にもなる。夕食を作るだけなのに、大学の費用と、さらに生活費までいただいでしまっているものなのか？

約束の時間より少しだけ早くマンションに着いた蓬は、深呼吸して部屋の番号を押した。

「はい」

「あ、あの。姫野です」

「どうぞ」

エントランスの解錠をしてもらい、マンションへと入る。

インターフォンを押し、待つことしばし、ドアが開けられた。

「こんにちは。昨日は……」

挨拶をし、頭を上げた蓬は、目の前の人物を見て思わず固まった。

えっ、このひと、弥義さん……よね？

でも……な、なんか雰囲気の違いすぎるんですけど。

ものすごく凝ったデザインのスーツを着ている。

こ、これって、あれよね？

丸美に無理やり連れていかれた執事喫茶の執事さんたちが着ていた制服っぽい。

「姫野蓬さんですね？」

「は、はいっ。あ、あの……弥義さんじゃ……？」

「私は貴島那義です。はじめまして」

那義？ そ、そうか……このひとが最初に陽介さんが電話をしていた那義さんなのだ。

よく似ている。顔に限ってだけ……

「は、はじめまして」

「さあ、どうぞ入って」

「は、はいっ」

ど、どうしよう。このひと、弥義さんと違って、ものすごく緊張する。

無表情だし、とっつきにくい。

弥義さんはどうしたのだろう？ どうせなら、弥義さんのほうがよかったのに……

おたおたしつ、那義に勧められるまま、昨日座ったソファに腰かけた。

沈黙の中、向かいから目を細めて見つめられ、緊張がさらに高まる。

「難関を見事突破しましたね。まずはおめでとう」

そっけない物言いに一瞬なんのことだかわからなかったが、すぐに料理のお受験に通ったことに違いないと気づく。

「は、はい」

焦^{あせ}って言うのと、くいつと右眉を上げられた。その反応に「ひいつ」と悲鳴を上げそうになる。

「これから試用期間に入ります。三日から一週間をめどに考えています。ただし、日曜日は休みになります」

「試用……期間？」

「ええ。無事、試用期間を終えられましたら、本採用となります」

どうやら、本決まりというわけじゃなかったらしい。そうわかってちよつと気落ちしたが、まあ望みは絶たれていないのだ。そのことを喜ぶべきだろう。

「ですが、本採用となる確率は高い」

その言葉に思わず笑みを浮かべた蓬とは裏腹に、那義は考え込んだ様子で「ただ……」と続ける。蓬は笑みをひっこめ、那義の言葉を待った。

「採用の際には、ある条件を呑んでいただきたい」

条件？

「あの、どんな？」

「貴女には、男になつてもらおう」

夕食を作りながらも、那義の口にした条件が頭から離れず、蓬は激しく動揺していた。

那義の説明によると、彼らが若と呼ぶオーナーは、女性を近づけたがらないらしい。その理由は教えてもらえなかったが、蓬が女である以上、採用されることは絶対にならないという。それで男のふりをしろというわけだ。

騙^{だま}したりしていいんですかと聞いたら、「若がお気づきにならないければ、なんの問題もない」と言われた。理解に苦しむが、蓬としては条件を呑むよりない。この話が消えたら大学は休学しなければならぬ。逆に考えれば、男のふりをするだけで蓬の望みは叶うのだ。

だが、そのためには……

蓬は奥歯を噛み締めた。

誰の目から見ても、男に見えなければならぬということだ。いまはセミロングのこの髪……切らなければならぬ。

けど、やるしかないよね？

蓬は鍋をかき混ぜながら、自分に強く問いかけた。

「ふむ。ビーフシチューですね」

突然の声に、蓬はぎよつとして顔を上げた。いつの間にか那義が隣に立って鍋を覗き込んでいる。

「は、はい」

「ありがたいですね」

「あ、あの……ありがたいって？」

「もちろん貴女の料理の腕がいいことですよ。……若は、昨日の夕食を作ったのは、私だと思っておいでなのです」

「はいっ？」

「全部食べてしまわれた。今日の夕食は美味しかったというお言葉までいただきました」

□元に微かな笑みを浮かべて言う那義に、蓬は戸惑った。

「それじゃ試験にならないような……？」

「試用期間で、まず間違いなく、若は私の料理では満足できなくなります。そうなれば、若はどんな条件を呑んでも、必ずあなたを雇うでしょう」

確信を込めて那義が言う。

「そ、そうでしょうか？」

「ええ。若をよく知る私が言うのです、間違いありません」

蓬は納得して頷いた。

7 覚悟

日曜日があけて、試用期間の三日目となる月曜日、夕食を作りに行った蓬を出迎えてくれたのは

那義だった。今日も那義は隙のない完璧な執事姿。

「こ、こんにちは」

「ちょっと緊張を感じつつ、挨拶する。」

「やりましたよ」

真顔でそう言われ、一瞬なんのことやらわからなかった。

「はい？ あの那義さん、やったって？」

那義がゆっくりと頷き、□元に笑みを刻む。彼の笑みを見たのは初めてだ。ちよつとどきりとしてしまう。

「本採用です。姫野さん、貴女は合格したのですよ」

「えっ、でもまだ、試用期間の三日目で……」

「そんなことは関係ありません。すでに合格が決まったのですから試用期間は終わりです」

「どうやら、喜んでいいらしい。が、決まったことによって新たな不安が湧いてきた。」

わたし、男にならなきゃならないんだよね？

「正式採用ということで、話があります。上がってください」

「は、はい。それじゃ……お邪魔します」

一気に事態が前進し、気持ちがついていかない。蓬はぎこちない動きで靴を脱いだ。

居間に通され、那義の向かいのソファに座る。

那義が用紙を差し出してきた。正式採用に関する書類だ。雇用期間は今日から来年の三月末までで、

一年分の学費は一括で支払われ、その他に生活費として月々十万円が支給されることになっていた。
「じゅ、十万円？」

「生活費ですが、足りませんか？」

「い、いえ、そうじゃなくて、お、多すぎると思います。……だって、わたしは夕食を作るだけで、一年分の学費も払っていたんだけどに」

「こちらは貴女の働きに見合うものをお支払いしようというのです。黙って受け取りなさい」

「で、でも……いくらなんでも十万は多すぎます。それに他にもバイトをするので、生活費にはそちらをあてますし」

「山本の店で働くと聞いています。が、週に一度では、たいした額にはなりませんよ。アパートの家賃や光熱費だけで……」

「靴屋でもバイトしているんです。もちろん夕食作りに支障がないようにしますけど、そのバイトを続けよう……」

「そちらは、ただちに辞めてください」

「えっ？」

「どう考えても無理でしょう？ 休みなくバイトをしながら大学に通い続けようなんて、姫野さん、あまりに甘い考えですよ」

厳しく叱責され、蓬は顔を真っ赤にして俯いた。

「貴女は明日、靴屋のバイトを辞めること。いいですね？」

蓬は顔をしかめつつも、「わかりました」と答える。

那義の言うことは正論だ。大学に通いながら休みなくバイトするなんて、最初はよくても次第にしんどくなっていくだろう。

雇用契約書に目を通した蓬は、あまりの好条件にぐくりと唾を呑み、震えそうな手でサインをした。「夕食作りは月曜から土曜まで。五時くらいから入っていたら七時までにすべてを終えてください。日曜日は休みですが、山本の店でのバイトがありますね。こちらは、十一時から五時までの六時間ということにしました」

「は、はい」

さくさく話を進めていく那義に、焦りながら頷く。

「食材などはこれまでどおり、私のほうで管理します。欲しい食材がありましたら、早めに言ってください」

「わかりました」

「若のことは、お聞きになりましたか？」

これまでになくやわらかな声で問われ、蓬は首を横に振った。

「若の名は、椋崎圭。二十六になる。私や弥義より一つ下です」

「えっ？」

「うん？ どうしました？」

「いえ……」

びつくりだ。確かに那義と弥義は若と呼んでいるが……そんなに若いひとだとは思わなかった。なんとなく三十代か四十代かと……。それに那義と弥義……。いまの話だと……？

「あの、那義さんと弥義さんって？」

「我々は双子ですよ」

「ええっ!？」

思わず叫んでしまった。だって、どう見ても、弥義のほうが若く見える。いや、那義が落ち着いて見えすぎるといふべきか。

「まあ、貴女の反応は普通です。私は常に、弥義よりも年上に見られますからね」

「か、顔は、とてもよく似ていらっしやいます。ただ雰囲気がいぶん違っていらっしやるなど」

「うむ。では、話を進めますが……」

相槌あいづちを打った那義は、あっさりと言を変え、蓬は思わず姿勢を正した。

「は、はい」

蓬の返事に、なぜか那義が顎あごに手を当てて考え込む。蓬は再び緊張した。

「これから貴女には、男としてふるまっていただかなくてはなりません」

「そ、そうでしたよね」

すでにわかっていたことだが、現実になると思うと、戸惑ってしまう。

「ご自分のことを『わたし』と呼ぶよりは、『僕』、『俺』のほうがよいですね。まあ、貴女の場合だと、僕のほうが妥当でしょうか」

「ぼ、僕……ですか？」

「ええ、早く慣れてください」

顔が引きつる。簡単に言ってくれるが、これってかなり大変なことだ。

さらに袴崎に疑いをもたれないためにも、高校生ということにし、実際に葵高校あおいこうに通っている香織かおりの従弟の名を借りることになったと言われ、蓬は困惑した。

「大島悠樹。呼ばれて返事ができるように、頭に叩き込んでおいてください。私も今後は貴女のことを大島君と呼ばせていただきます」

情報をいったん頭の中で整理したいのに……那義はさらに説明を続ける。

「高校三年生。制服は、山本のほうで用意できるとのことです。それから……」

「あ、あのっ!」

蓬はようやく声を上げた。那義が言葉を止め、蓬を見つめてくる。

「あの。一度、整理を……」

那義は右眉をくいと上げ、「どうぞ」と言う。

「え、ええーっと、わたしは……」

「僕」

即座に訂正され、蓬は頬をひくつかせた。すでに始まっているらしい。

「ぼ、僕は……大島悠樹。高校三年生」

「よくできました」

那義の返しに頬が赤らむ。那義の表情、言葉の響き……馬鹿にされたとしか思えなかった。「若にも、貴女について説明することになりますが、ご両親がペンションの改築をするので、学費を出せないというあたりは真実にそって話します」

「は、はい」

赤らんだ頬を隠し、俯うつむきがちに答えた。

「それと、貴女にはあとひとつ、クリアしていただかねばならないことがあります。今後、貴女と若が顔を合わせることがないとはいえませんが、その場合、いまのままの貴女では、問題でしょう？」

そう口にする那義の眼差しは蓬の髪に向けられている。

「髪ですね？」

那義が頷く。

「明日までに切ってください。もちろん着る服も、男に見えるものにしていただかなければなりません」

「はい。では、それも明日までに……」

髪を切るというのは正直とても辛い。だが、蓬は平気なふりをした。

このバイトをすれば、大学に行けるのだ。髪くらい……また伸びる。

「大島君、聞いていますか？」

強い声に蓬はハツとして顔を上げた。

「こちらで用意しましょうか？」

「あ、あの……聞いていませんでした。あの用意って何を？」

「服ですよ。男物の。こちらで用意……」

「じ、自分で」

蓬は咄とつ嗟さにそう言っていた。だが、ひどく動揺していて、正直自分が何を言っているのかよくわからない。

「大島君？」

冷静に呼びかける那義と目を合わせると、不思議と気持ち落ち着いていた。

「どんどん進む事態に動揺するばかりで、ちゃんとついていけていなかった。自分のことなのに……人任せで……わたし、覚悟が足りていなかった。自分のことなのに……」

蓬は姿勢を直し、まっすぐに那義を見た。

「自分で用意します」

「……そうですか。それでは、領収書をもらってきてください」

「はい？」

「制服代としてこちらが持ちます」

「これは制服というものではないと思います。着る服ぐらい自分で買います」

「そのような遠慮は無用です。領収書を提出してくださいさえいい。わかりましたか？」

言い聞かせるように言われたが、なかなか素直に受け入れられない。蓬は黙ったまま曖昧に頷いた。